

「江島縁起」の諸本と研究史

田中 亜美

はじめに

神奈川県藤沢市に属する江の島は、片瀬海岸と砂嘴で繋がった陸繋島である。島には江島神社の辺津宮・中津宮・奥（沖）津宮と、高僧たちが修行し、弁才天を拝したと伝えられる岩屋（龍窟）がある。⁽¹⁾近世までは、岩屋を本宮と称し、現在の奥津宮はその御旅所であった。中津宮・辺津宮はそれぞれ上宮・下宮と呼ばれていた。

史料に初めて江の島のことが見えるのは『吾妻鏡』寿永元年（一一八二）四月五日の記事で、源頼朝が藤原秀郷調伏のため、文覚に弁才天を勧請させた⁽²⁾と記す。ただしこの記事については、鎌倉後期に江の島側の伝承が取り込まれたものだとする指摘がある。⁽³⁾十四世紀後半から十五世紀前半にかけては、鶴岡八幡宮の供僧が江島別当を務めていたが、徐々に岩本坊をはじめ江島側の諸坊が台頭してくる。⁽⁴⁾近世初期までには、岩屋

本宮と御旅所を管理する岩本坊、上宮・下宮をそれぞれ預かる上之坊・下之坊という三坊体制が確立した。中でも岩本坊は、江の島における支配権を徐々に強めていき、総別当として上之坊・下之坊を末寺とした。⁽⁶⁾なお慶安二年（一六四九）、岩本坊は仁和寺の末寺に加わり、このころから岩本院と称している。⁽⁷⁾近世には庶民の旅が盛んになり、江の島は参詣と物見遊山の場として大いに賑わった。

神仏判然令以降、辺津宮・中津宮・奥津宮の三社は、それぞれ田寸津比売命・市寸島比売命・田紀理比売命の宗像三神を祭神とする。しかし依然として、江の島は弁才天の霊地として信仰されており、江島神社も自ら厳島・竹生島と並ぶ日本三大弁才天の一角を称する。

「江島縁起」は、江島弁才天の由緒を説くもので、真名本・仮名本の冊子や絵巻など、様々な形態のテキストが現存する。縁起で説かれる江の島成立の物語は、能『江野島』など芸能にも取り入れられることで広く流布していた。詳細は後述するが、これまでに「江島縁起」を対象として、諸本の紹介および、諸本間の比較による成立背景の推定、また縁起に説かれる弁才天信仰の分析などが行われている。筆者はこれまでに、「江島縁起」の冒頭で語られる弁才天の悪龍教化譚に注目し、話の構造が観音の毘那夜迦王教化譚に做ったものであることを指摘した。⁽⁸⁾

小稿では、「江島縁起」を対象とする今後の研究のため、縁起の諸本及び概略と現在までの研究史を確認したい。

一 「江島縁起」 諸本とその概略

一・一 「江島縁起」 諸本

まず、「江島縁起」 諸本のうち主なものを以下に掲げる。諸本は真名本（A・B）・仮名本（C・D・E）の二系統に大別され、真名本が先に成立したとみられる。近世に版行された略縁起類については、ここでは省略する。諸本に関しては、近年までの研究を踏まえて詳細な解説を行った石塚勝の解題⁹⁾がある。以下A、Gの諸本概略は、主に石塚の解題に依拠し適宜情報を補った。

A 『相州津村江之島弁財天縁起』 漢文 一冊 二十八紙 一五・〇×一一・五cm 神奈川県立金沢文庫保管

昭和二十六年（一九五二）に金沢文庫が購入したもので、元亨三年（一二三三）九月十五日写了との奥書がある。この書写年代が正しければ、現存する最古の「江島縁起」写本にあたるが、大幅な落丁・乱丁がある。第一・二紙には皇慶の伝を記すが末尾を欠き、第三紙から冒頭を欠いた空海伝が始まる。空海伝が終わると円仁伝・安然伝と続き、後述する「安然和尚記」および「安然秘所記」までを記して縁起は終わる。島の成立と役行者及び泰澄の伝の部分は完全に欠落するが、残存する本文はBとほぼ同じであり、同じ誤記が見られることから、Bと近い関係にあるものと考えられる。是沢恭三は「写本作成後、数頁を紛失し、或は綴連をしたもの¹⁰⁾」と推測する。形態から、称名寺にあったものと考えられており、石塚は、書写の時期には既に¹¹⁾

称名寺が律宗となっていたこと、また同時期に江の島も律宗の影響下にあったと考えられていることから、「江島縁起」の最古写本を伝えたのが律宗の僧であった可能性を指摘する。なお、納富常天「江の島に関する二・三の資料」(『金沢文庫研究』第百九十二号、一九七二・四)、石塚勝「江島縁起(解題と釈文)」(藤沢市文書館編『歴史をひもとく藤沢の資料』三(片瀬地区)付録、藤沢市文書館、二〇一八・三)に翻刻がある。

B 『江嶋縁起』 漢文 一卷 縦三二・八cm 料紙二十四枚 江島神社蔵

真名本縁起と通称される。奥書には、応永二十年(一四一三)十一月、日本の滅裂を嘆いた備州宮内の鏡麗大徳が南閩福州路の游子に書写させたこと、さらに享祿四年(一五三一)天台宗の清鏡院乗海が写したことを記す。ただし、以上の記載の後に「云々」とあるため、現存するのは乗海による写本をさらに転写したものであることになる。実際の書写年代について、服部清道は中世末または近世初期と推定する¹²⁾。天保十二年(一八四一)成立の『新編相模国風土記稿』巻第百六には岩本院の什宝として、この写本およびCが挙げられる¹³⁾。内容は後に概略を掲げた通り、江の島の出現と弁才天による五頭龍教化を語った後、役行者・泰澄・道智・空海・円仁・安然の伝を記し、最後に皇慶による縁起の撰述と以後の伝来を語る。安然伝の末尾には、「安然和尚記」として竹生島を引き合いに出し江の島を称える記述と、「安然秘所記」の引用という形で江の島各地の名所・奇岩を説明したものが置かれるが、これらの出典は未詳である。諸本の中でも、基本的な内容を完備し、目立った錯簡や欠落がない。服部清道編『藤沢市史資料』第二十集(藤沢市教育委員会、一九七六・二)。

『神道大系』神社編十六（神道大系編纂会、一九八〇・三）、石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」に翻刻され、『江島縁起』（遊行寺宝物館、二〇一七・一〇）には翻刻と影印が、今野達「真名本『江島縁起』考」、『わが住む里』四十一号、一九九〇・三↓『今野達説話文学論集』勉誠出版、二〇〇八・三）に翻刻と訓読がある。

C 『江島五卷縁起』（絵巻） 漢字仮名交り文 五卷 縦三三・八cm 岩本楼蔵

絵巻の中では現存最古のもので、貞享二年（一六八五）成立の『新編鎌倉志』巻六に、岩本院の宝物として記される「江島縁起」五巻は、この絵巻とみられる。現在は岩本院の後身である旅館岩本楼が所蔵する。奥書はないが、画風から室町時代後期の成立が有力視されている。¹⁵ 詞書は漢文訓読体で、一読したところ、**B**の書き下しをもとに独自の文飾を多く加えたような印象を受ける。内容は弁才天の五頭龍教化に始まり、役行者伝・泰澄伝・道智伝・空海伝・円仁伝・安然伝と続く。「安然和尚記」までの構成は**B**と共通するが、**B**にある「安然秘所記」はこの絵巻にはない。その後の内容は**B**にないもので、慈悲上人良真が、一千余日の修行を経て建仁二年（一一〇二）に弁才天を拝し、元久元年（一一〇四）宋に渡って慶仁禅師に会ったところ、慶仁は江の島を知っていた。そして良真に、社壇の北の池のほとりにある蝦蟇の形をした石は一切の障碍神であるから、將軍を守護するためにこの石に向けて社を建てよと告げ、地鎮の石を授ける。¹⁷ 帰朝した良真は慶仁の教えに従って社を建て、建永元年（一一〇六）に遷宮した。これが下宮の由来であるとし、縁起が終わる。観世長俊作の能『江野島』には**C**からの引用とみられる箇所があり、作成にあたり長俊が**C**を参

照したと考えられている。¹⁸⁾『藤沢市史資料』第二十集、石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」に翻刻が、『鎌倉の絵巻Ⅱ（室町時代）』（鎌倉国宝館図録第二十六集）、『特別展 江島縁起』には翻刻と影印がある。

D 『江嶋縁起』（絵巻） 漢字仮名交じり文 五巻 縦三五・五cm 江島神社蔵

詞書はCとほぼ同じで、Cで漢字表記されていた語句を含めて大部分が仮名表記になっている。図様はCを踏襲するが、画風は異なり、Cを写して江戸時代に制作されたものとみられる。『藤沢市史資料』第二十集、『神道大系』神社編十六、石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」に翻刻がある。『特別展 江嶋縁起』は翻刻と影印を掲載する。

E 『相州得瑞嶋上之宮縁起』 漢字仮名交り文 一卷 縦二八・八cm 江島神社蔵

構成はCと概ね同じであるが、『先代旧事本紀』や『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』の引用、『太平記』にみえる北条時政の江島参籠説話を記すことなど、Cにはない記述も多い。江の島の成立、役行者・泰澄・道智・空海・円仁・安然の来島を語り、その後Cと同じく下宮創建が語られるが、下宮を建立した「慈悲上人」を良真でなく栄西としている。『先代旧事本紀』からは、大己貴命が国の要として打ち込んだ五つの椿（杭）が厳島・金華山・竹生島・富士山・江の島であるという説を引き、弁才天と天照大神・富主姫を同体とする。神奈川県立金沢文庫で二〇〇七年に開催された特別展「弁財天」で初めて公開され、その後

向坂卓也「相州得瑞嶋上之宮縁起について翻刻と紹介―」（『金沢文庫研究』三百十九号、二〇〇七・一〇）に翻刻された。向坂によると、書風や紙質などから考えて、写本年代は江戸時代中期を降らないという。石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」にも翻刻がある。

他に江の島の縁起を記す中世までの資料としては、以下のようなものが挙げられる。

F 光宗『溪嵐拾葉集』卷三十七「弁財天縁起」江島縁起事

『溪嵐拾葉集』は比叡山の光宗によつて南北朝期に作られた、天台宗の様々な教説・口伝を集めた百科事典といえる書物である。卷三十六に「弁財天法秘決」、卷三十七に「弁財天縁起」があり、「弁財天法秘決」については山本ひろ子によつて詳細な研究と、引用された弁才天法に関するテキストの翻刻が行われている¹⁹。卷三十七「弁財天縁起」は二十四箇条からなり、天川・巖島・竹生島・江の島の縁起、またこの四箇所に箕面・脊振山を加えて六所弁才天とすること、その他弁才天に関する諸説を記す。「江島縁起事」は、大山寺にあるという「江島縁起」を略抄する。大山寺の「江島縁起」は現存せず、詳細はわかっていないが、記された縁起には、皇慶に代わつて最澄の来島が語られることや、安然を法道和尚の子とすることなど、他本にはない内容が見られる。『大正新脩大藏經』卷七十六所収。先掲した納富常天「江の島に関する二・三の資料」、石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」にも翻刻がある。

G 日澄『日蓮聖人註画讃』

日蓮の伝で、詞書は日澄（一四四〇・一五一〇）による。龍口で斬られるはずであった日蓮が、江の島の神の加護で難を逃れる場面に、龍口刑場の起源として、江の島の成立と泰澄の説話とを引く。『続々日本絵巻大成』伝記・縁起篇二（中央公論社、一九九三・一一）などに影印・翻刻がある。

一・一・二 「江島縁起」の概略

右に掲げた諸本のうち、基本的な内容が揃ったBに基づき、概略を示す。段落番号は、筆者が私に付した。

①房・蔵・模三箇国の境、鎌倉郡と海月（久良岐）郡の間に深沢という湖²⁰があり、一身五頭の龍が棲んで、風水害を起こしたり、人に取りついて悪事を起こさせるなど人々を苦しめていた。五頭龍は人の子を食い、遂に人々は生贄を捧げるようになる。欽明天皇十三年（五五二）、大地が震動し天女が現れて、眷属たちと共に海上に島を出現させる。天女は弁才天女の応作、無熱地龍王の第三の娘である。五頭龍は島に降りた天女の姿を見て求婚するも拒絶される。そこで天女の教えに従い、殺生を止めることを誓うと、天女は五頭龍を受け入れ、龍は南を向いて龍口山となった。これを子死方明神²²という。弁才天は、方便の力で龍を降伏させ衆生を救うために島を作り、天女として垂迹したのである。これを江の島明神という。

②役優婆塞は葛城山に籠って修行し、鬼神を使役したが、一言主明神の讒言により伊豆大島に流される。し

かし夜ごと密かに富士山に通い、罪が晴れることを浅間大菩薩に祈った。文武天皇四年、紫雲を追って江の島の金窟に赴き、発願して不動明王呪を七日間誦すると、弁才天が現れる。

3 養老七年（七二三）、泰澄は江の島で大乘経や陀羅尼を読誦しつつ、毎日龍口山に参詣して法樂を行った。すると龍口明神が現れ、泰澄の法樂によつて三熱の苦しみを逃れ、宿命通を得たことを告げる。そして、国土に反逆者があれば、その首を斬り、神前に懸けるようにと言う。その後泰澄は江の島で修行を続け、弁才天の姿を拝する。

4 天平六年（七三四）、相模国余綾郡の道智法師が江の島で『法華経』を読誦していると、天女が毎日食物を供えにくる。道智は天女がどこから来るのか知りたくなり、藤の糸を針につけて天女の裳裾に刺す。糸を辿ると江の島の龍窟に龍がいて、その尾に針がついていた。龍は怒り、波を起こして道智を龍口山の頂まで流す。そして、以後江の島には藤を生やさず、僧を住まわせないと誓う。

5 幼少時より奇瑞を顕した空海は僧となり、渡唐して密教を日本に伝えた。弘仁五年（八一四）、東海へ赴いた空海は、江の島の山頂に彩雲と金龍が浮かぶのを見て来島する。金窟に参籠して七日、弁才天が現れる。「治国撫民の要術」を求める空海に弁才天は、国土に災いがあるときには江の島が鳴動すること、そこで「三部の妙典」を読説すれば、災いを除き、四天王・天・龍・鬼神等を召して国土を護ることを告げる。

6 円仁は最澄の弟子となり、唐に渡つて密教を学ぶ。最澄の夢告に従い、法全から「宇賀弁才」の法を受ける。帰国後の仁寿三年（八五三）に東海へ旅し、江の島に渡つた円仁は岩屋で修法を行う。すると弁才天が

現れ、空海に告げたのと同様に、国土の守護を告げる。円仁は江の島の東山に社壇を開き、弁才天は西山の金窟から東山に移った。

7 安然是、円仁の旧儀を尋ねて元慶五年（八八一）に江の島に来る。そして五ヶ月の修法の末、弁才天を拝する。次いで「安然和尚記」の引用として、琵琶湖の竹生島に生身の弁才天が住んで比叡山に繁栄をもたらすのと同様に、相模国の繁栄は江の島に住む生身の弁才天によるものだとする。さらに「安然秘所記」を引用し、江の島にある数々の岩屋や池、奇岩を挙げる。

8 延暦寺の皇慶は江の島の神威を顕し万民を利益するため、諸神の跡を尋ね古記をひらいて、永承二年（一〇四七）に丹波の池上房でこの縁起を著したとする。以後、縁起の相承を述べる。

9 応永二十年（一四一三）、日本の滅裂を嘆いた備州宮内の鏡麗の求めにより、「福州路遊子」が写本を制作する。さらに、この本は享祿四年（一五三二）、清鏡院乗海の筆によるものであると記す。

比較のため、前項の諸本A～Fにおける、構成および話の配列を表にして示した（表I）。

「江島縁起」を対象とした近代以降の主要な研究を、古いものから順に掲げる。

二 研究史

表 I 「江島縁起」諸本の内容と配列

※表は石塚勝「江島縁起形成の背景」

(藤沢市文書館『歴史をひもとく藤沢の資料』三(片瀬地区)、藤沢市文書館、2018・3)の表三「江島縁起諸本の所伝と登場人物」をもとに、一部改めた。

| 栄西伝 | 良真伝 | 8 皇慶伝 | 7 安然伝 | 6 円仁伝 | 5 空海伝 | 最澄伝 | 4 道智伝 | 3 泰澄伝 | 2 役行者伝 | 1 恵龍教化 | |
|-----|-----|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|--------|--------|----------|
| | | ① | ④ | ③ | ② | | | | | | A |
| | | ⑧ | ⑦ | ⑥ | ⑤ | | ④ | ③ | ② | ① | B |
| | ⑧ | | ⑦ | ⑥ | ⑤ | | ④ | ③ | ② | ① | C |
| | ⑧ | | ⑦ | ⑥ | ⑤ | | ④ | ③ | ② | ① | D |
| ⑧ | | | ⑦ | ⑥ | ⑤ | | ④ | ③ | ② | ① | E |
| | | | ⑧ | ⑦ | ⑥ | ⑤ | ④ | ② | ③ | ① | F |

□呉文炳『江島考』、書物展望社、一九四一・一

江の島について自然科学・人文科学の両面から概説する。『吾妻鏡』等に見える記録と、周辺の地層に関する研究論文を照らし合わせ、江の島の湧出や、片瀬海岸から江の島に渡る道の出現といった伝承の検証を試みている。また「江島縁起」には、五頭龍が人の子を食らうので、人々が恐れて逃げ去った場所を「子死越」（＝腰越）とするなど、地名の由来説話がみられるが、これらの地名においても諸資料の表記を比較し、成立過程を考察している。

さらに文芸・芸能史上の江の島に着目し、紀行文学における江の島の記事や、宴曲『江島景』・謡曲『江島童子』について、その表現と縁起や記録との比較を行っている。

「江島縁起」からは、八岐大蛇の神話と類型を同じくする五頭龍の出現が「日本民族精神の復興」を意味する点、十二神将への信仰や、空海を尊重する点、観音が重要視され、その本地が釈迦とされる点、神の名が多く記される点などからも鎌倉時代以降の特徴が窺えるところ。さらに文章の平易さ、生々しさを挙げ、縁起の成立は鎌倉時代以降、おそらくは室町時代であろうと指摘する。

□是沢恭三「江島弁財天信仰史」（前編）『東京史談』二十二卷第四号、一九五四・一二、（後編）同二十三卷第一号、一九五五・四↓復刊『江島弁財天信仰史』、江島神社社務所、二〇一九・五

初めに縁起の諸本を紹介し、次いで鎌倉時代・室町時代・江戸時代の江の島弁才天信仰史を論じた後、信仰の性格がどのように変遷してきたかを概説する。付録として、本編で触れた歴史上の事蹟をまとめた信仰史年表がある。

諸本についてその内容と、それぞれの奥書に記された写本年代が整理され、戦後の本格的な研究の基礎として重要な位置を占めてきた。Bを「江島縁起の最初のものとの面影を伝うるものとして最も重要なもの」と位置付け、他の「江島縁起」や宴曲・謡曲などは、いずれも真名本をもとに作られたのだと述べる。元亨三年（一三三三）の奥書を持つAの存在は、真名本の「江島縁起」が鎌倉時代末には存在したことの証とする。縁起各段の内容には踏み込んでいないが、空海と江の島の関係に関して、空海が江の島において護摩を修した灰で作ったと称する弁才天像が各地に伝わることに触れ、二十七例の所在と由緒を挙げた上で、江島弁才天が空海と結び付いて広く信仰されていたことを論じる。縁起から窺える信仰については、江の島弁才天の独自性が表れる前の、「専ら国家擁護を主とした奈良、平安の仏教の通性を反映」した一般的な弁才天信仰だとする。

『東京史談』に分割掲載された前・後編と、同著者の「相模国江島三坊の消長」（『国史学』第六十三号、一九五四・一〇）を合わせたものが、昭和四十年（一九六五）前後に江島神社から刊行されている。これを底本として令和元年（二〇一九）、江島神社蔵の八臂弁才天坐像が重要文化財に認定されたことを記念し、年表に明治六年（一八七三）以降の事跡を追加した上で復刊された。

□藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』、藤沢市、一九七〇・一〇〜一九八一・一〇

全七冊と年表一冊からなる。第四卷（通史編 考古編・古代編・中世編）では「江の島と片瀬」として、武士による江の島信仰、及び江の島の管理・支配体制を中心に論じる。江島明神への信仰が周辺の漁業民によつて古くから行われた可能性を指摘しつつ、弁才天の島として知られるようになったのは源頼朝以降であるとし、『吾妻鏡』を始めとする書物から江の島に関する記録を挙げていく。それをもとに、弁才天信仰は將軍を始め武士たちに広がっていったこと、並行して鶴岡八幡宮寺の供僧が江島別当を兼務する体制が成立していったことを述べる。また小田原北条氏の時代になると、鶴岡の供僧に代わつて江の島の坊住が台頭してくることを、古文書によつて指摘する。

第五卷（通史編 近世編）「社寺信仰と文芸の交流」では、岩本坊・上之坊・下之坊という江の島三箇坊の中で岩本坊が支配権を確立していく姿と、人々による江の島参りの様子を概説する。江の島弁才天像は、江の島で、時に江戸深川の永代寺で開帳され、寺院経営の有力な財源となっていた。

第七卷（文化遺産編・民俗編）では、「江島縁起」諸本を紹介する。なお、縁起諸本については、前節で触れたように『藤沢市史資料』の第二十集・第三十六集に翻刻がある。

□服部清道『江島縁起』考、『横浜商大論集』一〇号、一九七七・二

AとBを翻刻し、並べて比較する。A・Bに関して「原本は必ずしも同一本であったとは云われないとし

でも、同一系統本であったことは誤りないように思われる」と判じ、**B**は「内容においては完全」と判断する。乱丁・落丁の著しい**A**についても、**B**と比較することで復元を試みている。また、近世の資料における記述をもとに、成立と流布の状況を考察する。真名本縁起の成立年代に関しては、**B**の永承二年（一〇四七）皇慶作という記述には疑問を呈する。しかし『吾妻鏡』に記される寿永元年（一一八二）の勸請が縁起に記されないこと、「江島縁起」の道智伝と同じような伝説が貞応二年（一二二三）頃成立の『海道記』に記され、このころ既に一般に口承されていたと考えられることから、永承（一〇四六〜一〇五三）以後、貞応（一二二二〜一二二四）以前の成立と考えることが可能だとする。

他に重要な指摘として、近世以来「江島縁起」が引用された例の多くは、真名本ではなく**C**を始めとする仮名本に拠ることを述べる。真名本が参照された例には、先述した『日蓮上人註画讃』及び『新編相模国風土記稿』があるが、後者は前者の引用と考えられ、真名本を実見していない可能性があるという。また、江戸時代には真名本が一般には知られていなかったと指摘する。

□真保享「江島縁起絵巻」、『三浦古文化』三二号、一九八二・一一

Cの画像と内容を紹介し、各巻の構成を整理する。建永元年（一二〇六）社殿新造の記事があることから、詞書に関していえばそこから遠くない鎌倉時代前期に原本が成立し、転写が行われたものであろうという。画風については、波の表現に南北朝から室町時代の特徴を指摘し、山水の描き方に水墨画の技法が取り入れられてい

ることを挙げる。また画中の仏像に注目し、画家が仏画の制作に習熟していたことを想定する。総合的にみて、制作年代の推定は容易ではないとしながらも、成立年代は室町時代前半を下らないとし、制作された場所は中央でなく地方、中でも江の島と密接な関係にあった鎌倉であろうとしている。

□松本公一『溪嵐拾葉集』所引「江島縁起」について、『国書逸文研究』二二号、一九八九・一〇

「江島縁起」諸本の概要・系統を簡単に整理した後、Fの特徴を指摘する。道智の話の舞台が、Fのみ龍窟ではなく「新田四郎人穴」とされることについて、富士浅間信仰との関連を示唆する。また、漢文体ではあるが、江の島を訪れた僧たちの略伝を省略するなど簡潔な記述からは、真名本よりも仮名本にやや近いと述べる。その上で、Fを「江島縁起」の異本と位置付ける。

□福島金治「鶴岡八幡宮の成立と鎌倉生源寺・江ノ島」、地方史研究協議会編『都市・近郊の信仰と遊山・観光―交流と変容』雄山閣、一九九九・一〇

『江島縁起』のBと他本を比較し、先行研究を踏まえて縁起の成立年代・成立背景を考察している。Bの相承系譜に見える人名のうち明禪・忠舜・隆真の三名について、天台宗の書物に名前があることを指摘し、三名が比叡山に実在した僧である可能性が高いと推定する。また、縁起中の地理認識を実際の鎌倉・江の島周辺と対照し、鎌倉北部を流れる暴れ川であった柏尾川の氾濫を五頭龍の暴虐に重ねる。Bの内容には鎌倉

期以降の要素が見えないことを指摘し、その成立を十一世紀中期とみる。

□鳥谷武史「中世における宇賀弁才天信仰の研究―叡山と「江島縁起」―」（博士論文）、金沢大学、二〇一七・

三（金沢大学学術情報リポジトリ <http://hdl.handle.net/2297/48130>）

前半では宇賀弁才天の造像例を数多く挙げ、その姿や持物等を比較する。また天川弁才天信仰に見られる十臂弁才天像を取り上げ、図像の形成過程や修法との関連を解明する。後半では、宇賀弁才天信仰の視点から「江島縁起」の内容を分析する。

走湯山周辺の伝承との比較により、真名本『江島縁起』は二段階あるいは三段階の過程で成立したと推定する。江の島の成立および五頭龍の教化を語る部分は、走湯山を拠点とする修験者たちにより作られ、その成立は平安時代まで遡る可能性があるという。役行者から安然までの来島記事は、十三世紀前半に安居院の流れを汲む修験者によって作られ、「安然秘所記」の部分は、それよりも後に増補されたものと分析している。また道智・安然・良真の来島記事は、土着的な伝承が縁起に取り入れられたものであろうと述べる。仮名本系統（C・D・E）にのみ見える良真の下宮遷宮譚について、『仏牙舍利起』及び『智覚普明国師語録』に説かれる仏牙舍利請来譚の発展過程で形成されたものとし、仮名本の成立年代を一四世紀以降、室町時代と推測する。

その他特筆すべき指摘としては、「江島縁起」冒頭で語られる島の生成について、『三宅記』と同様に、海底噴火という現象が下敷きとなった伝承だとすることが挙げられる。

□石塚勝「江島縁起形成の背景」、同「江島縁起（解題と釈文）」藤沢市文書館『歴史をひもとく藤沢の資料』三（片瀬地区）、藤沢市文書館、二〇二八・三

「江島縁起形成の背景」では「江島縁起」の概要を紹介し、各段の内容が成立した背景と、真名本・仮名本の成立時期に関して先行研究の説をまとめている。また、付録の「江島縁起（解題と釈文）」のうち、解題では縁起諸本の詳細な書誌を記し、それぞれの成立年代に関して先行研究における説をまとめる。刊行時点までの「江島縁起」を対象とした研究をほとんどすべて網羅しており、今後の「江島縁起」研究における重要な基礎資料といえる。釈文にはA・B・C・D・E・F及び近世の版本『江之嶋大縁起略記宋朝伝来古碑略図』一冊の翻刻がある。『江之嶋大縁起略記宋朝伝来古碑略図』は始めに「江の島下の宮縁起五巻の略記」として、江の島の出現・円仁の来島・良真による下宮創建を記す。さらに『太平記』にある北条時政の参籠説話、杉山検校の伝があり、元禄六年（一六九三）下宮社領を認める朱印が下されたことが記される。末尾に「宋朝伝来古碑略図」として、「大日本国江島靈跡建寺之記」の題字を載せる。なお、下宮の五巻縁起は現存しない。

おわりに

以上、「江島縁起」の諸本と現在までの研究史を紹介した。諸本の翻刻・紹介や、系統分析は早くから行わ

れている。縁起の成立年代については諸先学がそれぞれに論じるところであり、真名本の原型が形成された時期はおよそ平安末期から鎌倉時代と考えられているが、絞り込みは困難である。しかし、縁起に表れた思想・信仰を読み解くことで、制作された環境の解明に近づいてきており、そこから年代の具体的な特定にもだんだん近づくことができるものと思われる。近年では、鳥谷武史が、「江島縁起」に見える宇賀弁才天信仰を論じてこれは従来の研究においてあまり踏み込まれることのなかった、縁起の内容自体を対象とした研究として重要な研究である。縁起の成立過程についても二段階あるいは三段階とする仮説を示し、各段階において走湯山周辺の修験者および安居院と繋がる修験者の関与があったと推測している。

しかし現在まで、縁起の文章表現そのものを対象とした研究は十分に行われてきたといえない²⁴。今後、本文に用いられた語句やその典拠を分析することで、縁起の撰述者たちの置かれた環境や意識を解明できると思われる、私もその一端を担いたい。

注

- (1) 江の島には、江島神社とその境内社以外にも、明治期の軍人である児玉源太郎を祀る児玉神社や、大崎稻荷神社などがある。
- (2) 黒板勝美・国史大系編修会編『吾妻鏡』前編（新訂増補国史大系三三二）、吉川弘文館、一九三二・八。
- (3) 伊藤一美『江の島、神の島から人の島へ』（藤沢市史ブックレット一〇）、藤沢市文書館、二〇一九・三。

- (4) 貫達人・三浦勝男編『鶴岡八幡宮寺諸職次第』（鶴岡叢書第四輯）、鶴岡八幡宮社務所、一九九一・一。
- (5) 藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』第四卷（通史編）、藤沢市役所、一九七二・三。
- (6) 岩本院の勢力拡大については、圭室文雄による岩本院文書を用いた一連の研究がある。圭室文雄「岩本院における末寺支配の過程」（『明治大学教養論集』第四十八号、一九六九・三↓村上直編『近世神奈川の研究』、地方史研究叢書三、名著出版、一九七五・一）、同「江の島岩本院における本末制度の確立」（『藤沢市史研究』第一号、一九七〇・一〇）、藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』第五卷（通史編）、藤沢市役所、一九七四・一〇など参照。なお、岩本院文書のうち中世のものは藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』第一卷（資料編）、藤沢市役所、一九七〇・一〇に、近世のものは第一卷及び第二卷（資料編）藤沢市役所、一九七三・三に翻刻がある。近世のものは『江の島岩本院の近世古文書』藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当、二〇〇三・三に改めてまとめられ、解説が加えられた。
- (7) 「仁和寺末寺召加之事」（岩本亮一郎氏所蔵文書）、『藤沢市史』第一卷（資料編）。
- (8) 田中亜美「弁才天の悪龍教化と龍口明神―江島縁起説話の成立をめぐる―」（『東洋の思想と宗教』三十八号、二〇二一・三）。
- (9) 石塚勝「江島縁起（解題と釈文）」、藤沢市文書館編『歴史をひもとく藤沢の資料』三（片瀬地区）付録、藤沢市文書館、二〇一八・三。

- (10) 是沢恭三『江島弁財天の信仰史』、東京史談会、一九五四・一二(前編)、一九五五・四(後編) ↓復刊『江島弁財天信仰史』、江島神社事務所、二〇一九・五。
- (11) 神奈川県立金沢文庫『弁財天…その姿と利益』、神奈川県立金沢文庫、二〇〇七・三。
- (12) 服部清道『江島縁起』考、『横浜商大論集』第一〇号、一九七七・二。根拠として服部は、Cと料紙の質がほぼ同じであることを挙げる。
- (13) 『新編相模国風土記稿』第四輯(鎌倉郡)(大日本地誌大系第四十卷) 雄山閣、一九三一・八。
- (14) 『新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』(大日本地誌大系第十九卷)、雄山閣、一九二九・八。
- (15) 藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』第七卷(文化遺産編・民俗編)、藤沢市役所、一九八〇・一〇、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館編『鎌倉の絵巻Ⅱ(室町時代)』(鎌倉国宝館図録第二十六集)、鎌倉国宝館、一九八七・九は室町時代後半とし、榑崎宗重「江島弁才天像及び江島弁才天絵巻に就て」は天文年間ごろの作と推定している。真保亨「江島縁起絵巻」、『三浦古文化』第三十二号、一九八二・一一)は室町時代前半とする。
- (16) 原文「大唐」。
- (17) かつての下宮である現在の辺津宮境内には「大日本国江島靈跡建寺之記」と題する石碑があり、慶仁が良真に授けたものと伝えられるが、摩滅のため本文は判読不能である。
- (18) 小林健二「芸能圏のお伽草子―観世長俊作《江野島》と『江島縁起絵巻』―」、『国文学：解釈と教材の

研究』三十九卷第一号、一九九四・一。

(19) 山本ひろ子『異神…中世日本の秘教的世界』、平凡社、一九九八・三↓『異神…中世日本の秘教的世界』下(ちくま文庫)、筑摩書房、二〇〇三・七。

(20) Cでは「武蔵・相模の境」。

(21) 深沢という湖が実在した記録は確認できないが、呉文炳『江島考』は『吾妻鏡』で鎌倉大仏が造られた所を深沢と呼ぶこと、「江島縁起」で深沢を南海の入江と記すことから、この一帯までが入江であったか、もしくは湖が存在した可能性を提示する。

(22) 龍口明神を指す。Fでは「龍口山/大明神」。

(23) 復刊版の編集後記による。合冊版は東京大学史料編纂所図書室・上智大学図書館・学習院大学図書館に所蔵が確認できるが、発行年月は未詳。

(24) 福島金治は仮名本にのみ見える表現に注目し、江の島信仰が国家鎮護を願うものから民衆の利益を願うものにならわっていったことが、仮名本の表現に現れていると論じる(前掲注3参照)。